



徳島の「お家芸」とも言われる陸上の投てき種目。女子砲丸投げの川口由真(生光学園)はその伝統を引き継ぎ、中学時代から全国上位ランカーとして同世代をけん引してきた。数々の結果を残してきた逸材は今夏、ついに高校最後の全国総体を迎える。「徳島の先輩方が上位入賞する姿を見てきた。今度は自分が後輩にその姿を見せたい」と意気込みを語る。

2020年10月、1年生ながら出場した全国高校大会で潜在能力の高さを証明した。1投目で14.37をマークして、そのまま優勝。これは高校1年の日本歴代1位記録となり、現在も破られていない。「いままで記録を伸ばせるのか。一躍その名を全国に知らしめると同時に、周囲からの期待も重くのしかかった。2年の県総体直前、右手

砲丸投げ・川口由真(生光学園) □ 1 □

「お家芸」上位入賞狙う



四国選手権で優勝し、全国総体出場を決めた生光学園の川口由真選手が投げる瞬間。鳴門ポカリスエットスタジアム

首を痛めた。記録を伸ばしたいさなかだった。「不安なことが多かった。苦らな本来の力が戻り始めた。思ったことが多かった。治療と並行して2月の記録会13.87を投げながら競技を続け、結局この年は13.61を投げるのが精いっぱいとなった。全国総体は13.55で7位に終わり、シーズンベストも13.63にとどまった。

右手首がよやく万全と持ち味は投げる方向に背を向けた状態から、助走をつけて振り向く際のスピード。女子砲丸投げで世界選手権に2度出場した同校の豊永陽子顧問は「全国の高校生で一番速い」と評価する。体幹がしっかりしている。体つきに励んでいる。炎

が「本番で一本(14.61台)を出したい」と真剣な表情で取り組んでいる。

今季の高校ランキングは4位。1位の選手は14.75、2位は14.62を記録しており、本番でもベスト3争いは14.6を越える好記録が求められそう。それでも他人の記録より、自分の動きの改善に集中していくだけ」と気負いはない。

長らく上位ランカーとして歩んできた競技生活は今夏、一つの節目を迎える。高校では国公立大などの進学を目指す特別進学クラスで学び、助産師になりたいという夢をかなえるため文武両道を実践している。「大学受験もあるので、いつまで競技を続けるかはまだ決めていない。とにかく今は全国総体で結果を出すことに全力を注ぎたい」と話す。

(軍士佳輝)

24年ぶりに四国4県で開催される全国高校総体(インターハイ)の開幕が1週間後に迫った。県内の高校で力を伸ばし、上位入賞を狙える実力者たちの横顔や、今大会に懸ける思いを紹介する。